

油代、 鹿分 油代、 鹿分五隻 寸代、 土隻
とうふ代、 鹿分 着代、 五隻 紙代、 四分五
隻 酒代、

年によつては白魚代、かき代等もある。これらによつて、組内の婦人が集つて腕によりきかけて御ちまうさを作つたのである。

三、龍王権現春祭り

戊戌の正月二十八日は

村の鎮守の龍王さまの

年に一度の初御縁日

我もおれもと参詣すれば

と音頭にあるように、近郷近在の善男善女が今日を情と着飾つた参詣人で、龍王山はごつた返したという。

標高三百余米の龍王山上には八丈龍王とお祀りして、海上安全の神として信仰され、靈験あらたかであつた。それ故にこそ遠回の道も遠しとせず参詣人がたえずあつた。祭の当日は一、馬居のあつた馬ふせというところには「にうり屋」が店開きして客を呼び、諸國の猿鳥まで集つて、あちらこちらの本陰で田座をつくりはくちを打つといふ有様、にわか市がたつみである。今では頂上石のほころが二つ残り、ローソクやさいせんの上つているところを見ると、時おり参詣人があるのである。正月二十八日には村から御神酒をあげ、菓ふやおにぎりの接待とすることは年中行事の一つになつて、今もつづけられてゐるが昔の面影はない。

龍王山の頂上からの眺めはすばらしい。東に木立、大江灘が見渡され、北に堅田平野、中山峠を見越して西谷鶴岡、市街地、港へと見はるかし、大入島、佐伯湾へと

視野が開け、南面すれば山又山の山岳美、西にははるかに大野郡の山又山が重なり合つて、かすんで消えるといふ景観である。

ここに一本の大松があつた。お為半蔵相見初の本松と名づけていたが、悪童のたぐひに焼かれて今はない。然し登り三十分、下り二十分というやさしい山で、ハイキングコースとして最適地といえよう。

(終)

「三國峠の戦跡」の記事について

(大分市津田内野宮三氏より御厚意寄書)

前巻 先日知人より佐伯史談館蔵書西土子書を見貰つて興味深く読みました。東葉芳子の書かれた三國峠の戦跡の文中、一五頁下段二行に、「伊東直記」と伊東直二は同一人物かと疑問視されてはいますが、人物が違ひますので御参考までにお知らせいたします。

記

伊東祐隆(直二) 鹿児島市後進出身士族

河内衛大尉 西南の役まで谷山区長

西南の役 薩軍四番大隊九番小隊長で従軍

熊本城攻撃等に参加 各地に戦蹟

明治十年六月一日 臼井城攻撃に参加

九月二十四日 重傷した山城山で降伏

十月十五日 裁判により士族を削除

徴後五年の判決を受く 年令三十六年十月

伊東直記

宮崎県飯肥士族 旧飯肥藩大参事

明治十年三月十六日 飯肥隊を編成 熊本城攻撃等に参加敗走

七月二十七日 飯肥を指揮中 官軍に降伏

十月三十日 裁判により士族を削除

徴後七年の判決を受く 年令四十一年四月

高橋清の戦記(以上)